

有明海産エツについて

田 北 徹

On the Fish of the Genus *Coilia* distributed
in Ariake Sound

Toru TAKITA

It has been reported that two species of the genus *Coilia* (Engraulidae), *C. mystus* (LINNÉ) and *C. ectenes* JORDAN and SEALE are distributed in China, Korea and Japan, and that in Japan, both of the species are distributed only in Ariake Sound which is situated in the west coast of Kyushu and the rivers which find the way to the head of the sound. However, nothing has been clarified about their life history, ecology and fisheries in the sound and the rivers.

In the course of the studies on the above lines from 1961 to 1965, 167 specimens, 70-370 mm in body length, of the genus were collected from Ariake Sound and the Chikugo River and examined for determination of species on the basis of four meristic characters, viz., number of anal fin rays, longitudinal scales, scutes and vertebrae. These characters were used by Yoshida to distinguish the foregoing two species collected in Korea.

According to the author's examination, the engraulid fish collected from Ariake Sound belong to only one species of the genus; in comparison of the characters of this fish with those of the two species collected in Korea as reported by Yoshida, the fish in Ariake Sound cannot be identified as *C. mystus* or as *C. ectenes*, but seems to be an intermediate form having intermediate characters between the two species.

Followings are the descriptions of 10 specimens collected from Ariake Sound and the Chikugo River; Head, 6.3~7.1 in body length; body depth, 5.9~7.2; length of pectoral filaments, 3.0~3.8; length of anal fin base, 1.7~1.8. Snout length, 5.1~6.4 in head length; eye-diameter, 6.1~7.1; postorbital length, 1.4~1.5; interorbital length, 3.0~3.4; length of longest dorsal fin ray, 1.2~1.3. Number of gill-rakers, 17~19 on upper limb and 21~25 on lower one of outer arch. Number of dorsal fin rays, 11~13; anal fin rays, 81~97; number of longitudinal scales, 70~79; scutes, 40~52; number of vertebrae, 71~80. In most of the specimens, the maxillary reaches to the base of pectoral fin.

The fish of the genus *Coilia* distributed in Japan was first reported in 1846 by Temminck and Schlegel. It is *C. nasus* collected by von Siebold from Nagasaki in the west coast of Kyushu. In 1926, this name was regarded by Jordan and Seale as the synonym of *C. mystus*

of China. However, the adjacent sea of Nagasaki is so oceanic, strongly affected by Tsushima Warm Current, that there must inhabit no fish of the genus which is generally distributed in blackish water. Moreover, it must have been difficult for von Siebold to get the specimens of China in Nagasaki in his days. Accordingly, it seems that the Siebold's specimens were not collected from the adjacent sea of Nagasaki, but from Ariake Sound, which is comparatively near Nagasaki (about 25 km from the City) and is the only area in Japan where the distribution of the fish of the genus *Coilia* is known.

If Siebold's specimens were collected from Ariake Sound, the regard by Jordan and Seale should not be right and the abrogated specific name, *C. nasus*, should be recovered. But, more examinations are needed to prove this presumption.

The fish of the genus *Coilia* is called "Etsu" by local people. It is distributed in the head region of the sound almost all year around and enter the down stream of the Chikugo River in the spawning season from May to August. It is abundantly caught with gill net and has much commercial importance in the down-stream of the Chikugo River and the waters of the sound near the mouth of the river in the spawning season, but the economic impotence and the commercial catch of this fish are not great in other regions of the sound or in other seasons.

緒 言

エツ類はカタクチイワシ科に属する魚で、アジアの東部および東南部に数種類が分布^{1・2・3・4})しており、いずれも河口域およびその附近の浅海に棲息している汽水性の魚である。このうち、本邦附近では現在までにマエツ *Coilia mystus* (LINNÉ) とチョウセンエツ *Coilia ectenes* JORDAN and SEALE の2種類の棲息が知られており、これらはいずれも中国大陸東岸および朝鮮半島に多く分布しているが、本邦では有明海だけに両種が棲息するとされている。我国におけるエツ類の分布についての最初の報告は Siebold が長崎で得た標本によって1846年に Temminck と Schlegel⁵) が *Coilia nasus* を記載したものであるが、その標本の漁獲場所については記録がない。この *C. nasus* はその後 Jordan および Seale²) と田中⁶) によって *C. mystus* (LINNÉ) の異名同種であるとされた。それ以後、有明海にエツ属の魚が棲息しているといういくつかの記録が報告されているが、有明海以外の水域からの確かな採集記録はない。有明海産のエツについては、1925年に Jordan と Hubbs⁷) が *C. ectenes* を、1931年に田中⁶) が *C. mystus* を、1937年に池田⁸) が *C. ectenes* を、また1955年に内田・塚原⁹) が *C. mystus* と *C. ectenes* の両種が棲息していることを報告している。また、吉田¹⁰) は1935年に朝鮮半島と有明海を含めた日本近海に両種が分布していることを報告している。以上のとおり、有明海にエツ属の魚が分布しているという報告は多いが、これらはいずれも有明海で標本を採集したという簡単な記録だけであり、くわしい採集地点は明らかにされてなく、当湾におけるエツの生態についてもこれまでにほとんどわかっていない。また、種類についても吉田も先に指摘しているとおり、数少ない標本について不十分な同定法によって記載された場合が多

いと考えられるので、再検討する必要がある。

筆者は有明海において内湾性魚類の増殖生態について研究を進めているが、当湾に棲息する代表的な魚類の一つであるエツ類について生態・生活史を研究するに当たり、従来、この湾に分布しているとされているマエツとチョウセンエツの2種類についてそれぞれの形態的な特徴および棲息域を明らかにする必要があるので、有明海湾奥部を中心にエツ類の成魚および未成魚の標本を集め、その分布および形態の検討を行った結果、有明海産エツ (Fig. 1) の分布についてほぼ明らかにすることが出来、また、種類についても従来の

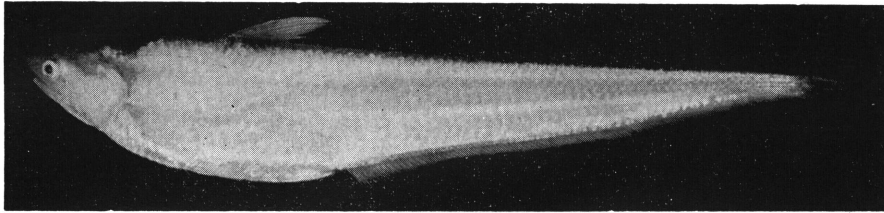


Fig. 1 Mature female of the fish captured in the Chikugo River on June 15, 1966. 329 mm in total length

説とかなり異なった結果が得られたので報告する。

本文に入るに先立ち、御指導と御校閲の勞をとられた本学部道津喜衛助教授、筆者が九州大学に在学中およびその後も懇篤なる御指導と御助言をいただいた九州大学塚原博教授および多くの御助言をいただいた同大学内田恵太郎名誉教授、貴重な文献を見せていただいた水産庁西海区水産研究所真道重明博士に深謝の意を表する。また、度々の採集の折に多大の御便宜をいただいた福岡県城島町江島藤男氏に厚く御礼申し上げる。

分布および漁業

有明海は九州西岸に位置する内湾で、これまでに、その独特な海況および特異な生物相について多くの研究が報告されている。^{6・8・9・11・12・13} この海は奥部に筑後川を初めとする多くの流入河川があり、通常、奥部の汽水と湾口部の外洋水との間に顕著な塩分傾斜が形成されている。また、水深は口部および中央部では深いが奥部は浅く、水深10m以下の浅海が広がっており、大きな潮位差と相まって干潮時には広い干潟が形成される。

筆者はこの数年間、有明海における魚類相を調査するために、有明海周辺の各種の漁業による漁獲物調査および聞き取り調査を行ってきたが、これによると、エツは1年を通じてほとんど湾奥部のみで漁獲されているが、湾の中央部および湾口部ではまれに混獲される程度であり、季節的な来游も行われていないと考えられる。湾奥部では季節によって漁場が異なる。すなわち、5～8月の産卵期には主に湾奥部に注ぐ最も大きな河川である筑後川の下流や河口域で流し網や底刺網等の刺網類によってかなりの量がまとまって漁獲されている。しかし、産卵期以外の時期には上記のような限られた水域で多量にまとまって漁獲されることはなく、湾奥部と筑後川の下流において色々な網漁具によって混獲され、冬期には湾奥部沖合の比較的深い水域で漁獲されることが多い。筑後川の下流では産卵期以外の時期にも漁獲されるが、その量は産卵期にくらべて非常に少ない。エツ類は一般に産卵期に河を溯上し、^{4・14・15} 河中で産卵を行うとされているが、この数年間に筆者が行っ

た調査によれば、有明海産エツの産卵期における漁獲は主に筑後川下流で行われること、筑後川下流で漁獲されたエツの中に完熟またはそれに近い雌個体が多くみられたが、有明海奥部で漁獲されたものの中に完熟雌はみられなかったこと、および、稚魚ネットによって筑後川下流および有明海奥部において天然卵の採集調査を行った結果からみると、有明海産エツは湾奥部に注ぐ河川（現在までに筑後川のみで確認）の下流に溯上して産卵を行い有明海内では産卵はほとんど行われぬ* と考えられる。したがって、有明海においてはエツは夏の産卵期には湾奥部に注ぐ河川の下流に溯上して産卵を行い、冬期には湾奥部沖合のやや深い水域で越冬し、その他の時期には湾奥部および河川の下流に広く分散して分布するという小規模な季節移動を行っていると考えられる (Fig. 2)。以上に述べたとおり、エツは有明海奥部および筑後川下流でほとんど周年にわたって漁獲されているが、

とくに産卵期はまとまった量が漁獲され、また、味が最も良い時期であること、および、筑後川下流域における地域的な好みもあって、5~7月に筑後川下流で多く漁獲されており、その他の時期や水域における漁獲はこれにくらべて非常に少ない。

材料および方法

今までに報告されている有明海産エツ類の記載によれば、当湾には上記のとおりマエツとチョウセンエツの2種類のエツが棲息しているとされており流入河川の下流の淡水域からより塩分の高い湾奥部の汽水域までの間でこれら2種類のエツの棲息域が種類によって異なることが考えられる。したがって、有明海産エツは主に筑後川で漁獲されているが、1961~1965年の3~10月に筑後川および有明海奥部の出来るだけ多くの場所で漁獲されたものから標本を集めた。標本の漁獲地点をFig. 2に、標本の採集記録をTable 1に示す。これらの標本の採集漁法は河中で

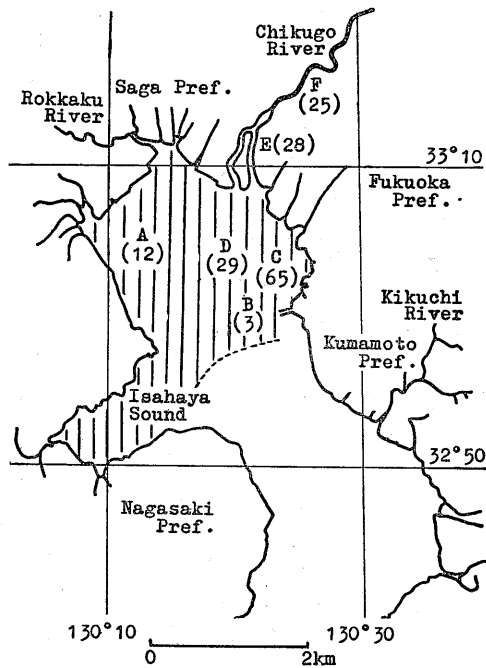


Fig. 2 Map of Ariake Sound.
Shaded part showing the area where the fish is distributed.
A~F : Sampling station.
number : Number of the specimens collected from the station.

は刺網と投網、海では竹羽瀬と刺網である。研究に用いた標本の個体数は計167尾で、そ

* 先に述べたとおり、有明海奥部には多くの河川が流入しているので、湾奥部一帯および各河川の河口域に拡がっている汽水の塩分は陸水の流入量によって大きく変化し、出水の後には湾奥部にまで淡水が拡がり、湾奥部で淡水魚が漁獲されることも珍しくない。したがって、エツの分布域および産卵場も河川の水量によって多少の影響を受け、渇水期には河川の上流部へ、出水時には反対に湾奥部へという多少の移動がみられるようである。

Table 1 Deta of collected specimens

Sampling station*	Date	No. of specimens	Sampling method
A	May, 1961	1	set net
ク	June, 1963	3	ク
ク	Aug., 1963	1	ク
ク	Oct., 1963	7	ク
B	Sep., 1961	3	ク
C	July~Aug., 1962	55	ク
ク	Aug., 1961	7	ク
ク	Sep., 1961	3	ク
D	Mar., 1962	29	ク
E	July, 1963	28	drift net
F	April, 1965	1	cast net
ク	June, 1962	6	gill net
ク	July, 1961	9	ク
ク	July, 1962	3	ク
ク	Aug.~Oct., 1963	5	cast net
ク	Oct., 1962	1	ク

* see Fig. 2

のうち、有明海でとれたものは108尾、筑後川でとれたものは59尾である。矢部¹⁴⁾によれば、朝鮮半島榮山江下流で漁獲されるマエツとチョウセンエツの5月(マエツの産卵期)における体長はそれぞれ150~240mmと220~310mmであったとされている。有明海および筑後川ではエツは刺網類で漁獲される場合が多いが、この漁具では使用する網目以下の大きさの個体はとれにくいという点を考慮する必要があり、したがって、標本は全漁獲物からの任意な抽出のほかに小型の個体を特に撰択的に集めて上記の欠点を補うように努めた。測定に用いた標本の体長をFig. 3に示す。但し、体長の測定はホルマリン固定後の標本

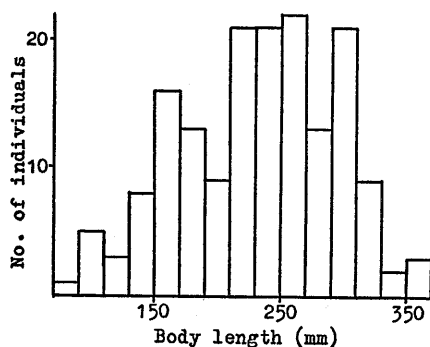


Fig. 3 Body length range of the specimens.

によった。測定形質の選定は先に吉田¹⁰⁾が朝鮮半島の郡山と洛東江口で採集したマエツとチョウセンエツについて測定を行った結果両種の相違が明確にあらわれたとされている4つの形質、すなわち、臀鰭条数、縦列鱗数、稜鱗数と脊椎骨数をえらび、このうち、吉田の測定結果からみて最も明確な特徴が期待出来る脊椎骨数については全個体(167尾)について測定したが、他の3形質については一部測定しなかったものもあり、臀鰭条数については137尾、縦列鱗数は89尾、稜鱗数は92尾について測定を行った。

結果およびその検討

Fig. 4～7 は筆者が有明海産エツについて行った上記4形質の測定結果および吉田¹⁰⁾が朝鮮半島産のマエツおよびチョウセンエツについて報告している測定結果をヒストグラムに示したものである。このうち、朝鮮半島産エツ類の各形質の分布図によれば、脊椎骨数、縦列鱗数は両種の値が全く重複してなく、臀鰭条数、稜鱗数は一部重複しているが、2つのモードが存在することによって2種類の差異が明らかである。しかるに、筆者が筑後川と有明海とから採集した標本の測定結果によれば、いずれの形質についても2つ以上のモードが認められるものはなく、また、同一時期に筑後川（採集点 Fig. 2, E, F）でとれたものと有明海（Fig. 2, A, B, C, D）でとれたものとの相違および各形質の性別による相違も認められなかった。したがって、筆者が採集した標本は上記の測定結果からは1種類であったと考えられる。

次にこの1種類がマエツとチョウセンエツのいずれに属するかについて吉田の研究結果との比較検討を行った。

臀鰭条数（Fig. 4）：筆者が採集した有明海産エツの臀鰭条数の値は81～97、平均は

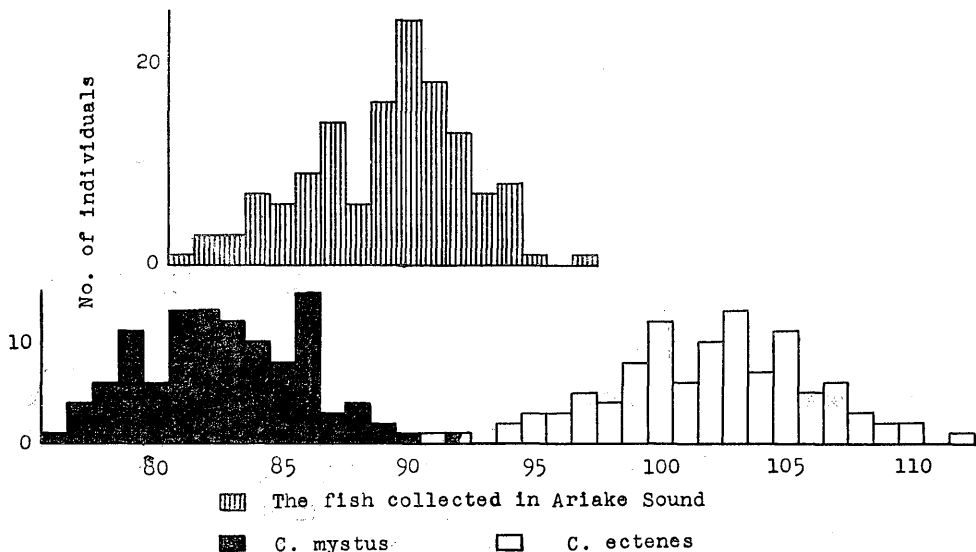


Fig. 4 Comparison of number of anal fin rays between two Korean species. (modified from Yoshida's figure 1935) and the fish collected in Ariake Sound.

89である。吉田によるマエツとチョウセンエツの値は91～92において重複しているが、その重なりはわずかであり、2つの明りょうな山が存在している。有明海産エツの値はマエツの値にやや近く、81～92においてマエツの値と重複しているが、チョウセンエツとも90～95において重複しており、両種の間接の値を示している。

縦列鱗数（Fig. 5）：マエツとチョウセンエツの値は接近しているが、全く重複していない。有明海産エツの値は70～79、平均75であり、ほぼチョウセンエツの値と一致し、マエツの値とは重複しない。

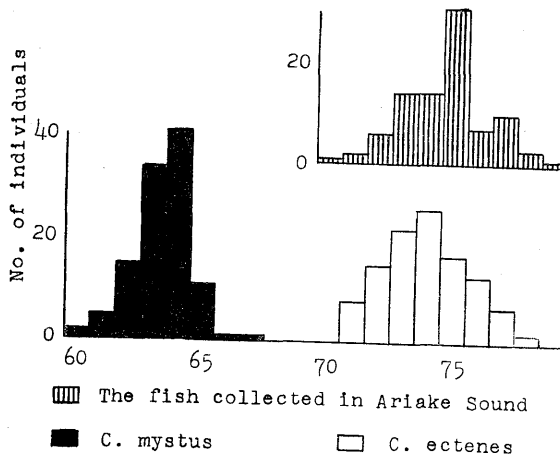


Fig. 5 Comparison of number of longitudinal scales between two Korean species (modified from Yoshida's figure 1935) and the fish collected in Ariake Sound.

稜鱗数 (Fig. 6) : マエツとチョウセンエツの値は近似し, 重複する範囲は大きい, モードはそれぞれ42と50である 有明海産エツの値の平均は46, モードは48で, これもマ

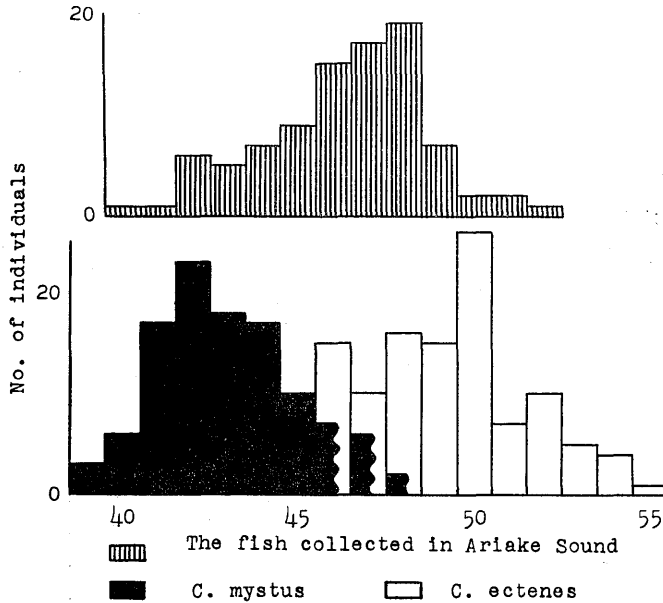


Fig. 6 Comparison of number of scutes between two Korean species (modified from Yoshida's figure 1935) and the fish collected in Ariake Sound.

エツとチョウセンエツの中間の値を示している

脊椎骨数 (Fig. 7) : 吉田によれば, 脊椎骨数は両種の明りょうな差異を示し, 最も重要な識別点とされている. マエツとチョウセンエツの値はそれぞれ65~69 (モード67) と

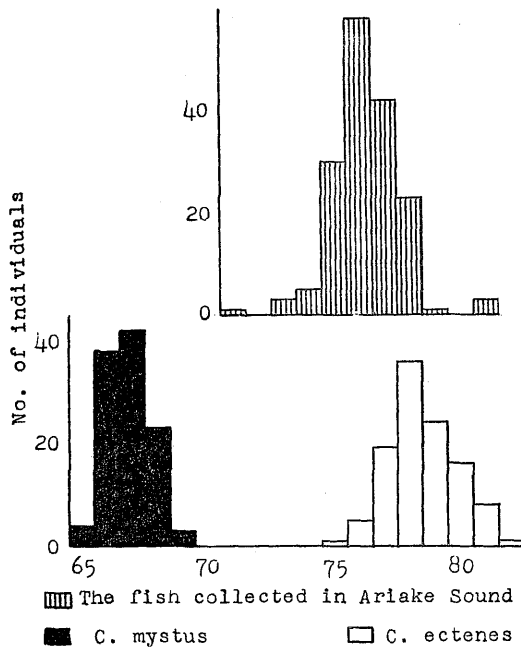


Fig. 7 Comparison of number of vertebrae between two Korean species (modified from Yoshida's figure 1935) and the fish collected in Ariake Sound.

75~82 (モード78)で、他の形質にくらべて変動の範囲が狭く、両種の差は大きい。有明海産エツの値は71~80 (モード76)で、チョウセンエツの値と大きく重複し、マエツの値とは重複しないが、チョウセンエツの値とも全く一致しているのではなく、マエツ側へのずれがみられる。

上に述べた4形質のうち、脊椎骨数以外はマエツとチョウセンエツの値が非常に接近しているかまたは重複しているために、筆者が有明海産エツについて行った測定の方法が吉田の測定法とわずかでも違っていれば、両者の測定値の比較によって実際とは異なった結果が得られることが考えられる。これを確かめるために、本学部練習船長崎丸が1966年1月19日~30日に東支那海の以西漁区278, 287, 288, 289, 297でトロール試験操

業を行った際に漁獲され、中国大陸産のチョウセンエツと同定された2尾(全長357, 376 mm)について、有明海産エツについて行ったと同様の測定を行ったところ、その値は全て吉田によるチョウセンエツの測定値の範囲の中にあり、有明海産エツとの比較では、縦列鱗数以外の各形質は全て有明海産エツの値よりも大きかった。

Table 2 Descriptions of the fish of the genus *Coilia* collected from Ariake Sound.

Total length	223~398 mm
Body length (B. L.)	204~368 mm
Head length in B. L.	6.3~7.1
Body depth in B. L.	5.9~7.2
Length of pectoral filament in B. L.	3.0~3.8
Length of anal fin base in B. L.	1.7~1.8
Interorbital length in head length	3.0~3.4
Post-orbital length in H. L.	1.4~1.5
Eye diameter in H. L.	6.1~7.1
Snout length in H. L.	5.1~6.4
Length of the longest dorsal fin ray in H. L.	1.2~1.3
Number of gill raker	17~19/21~25
Number of dorsal fin rays	11~13

有明海産エツの全長223~398mmのもの10個体について先に述べた4形質以外の項目の測定を行い、この結果を Table 2 に示した。これらの項目は Jordan と Seale (1905)¹⁾, Jordan と Stark (1906)¹⁶⁾ および Tchang (1938)¹⁷⁾ が中国大陸産のチョウセンエツ *C. ectenes* について, Tchang¹⁷⁾ がマエツ *C. mystus* について測定し, 報告しているものであるが, 体部比はわずかな測定法の違いによっても大きな差となつてあらわれやすいので, 同一人の測定によらない値を比較するのは危険であり, また, その比較によって両種の明確な相違があらわれるものはなかったので, 上記の報告中の測定値との比較は行わなかった。上記の Jordan と Seale によるチョウセンエツの図版と Tchang によるマエツの図版をくらべてみると, チョウセンエツの胸鰭が非常に長く, 臀鰭基底のほぼ中央部にまで達しているのに対し, マエツの胸鰭は比較的短く, 臀鰭の前端により達しているにすぎないが, 有明海産エツの胸鰭はこのマエツの図とほぼ一致する。

Jones と Menon¹⁵⁾ はエツ属の魚には尾部の再生が多くみられることを述べているが筆者も有明海と筑後川で, 一旦尾部が損傷を受けたのちに尾鰭が再生したと思われる個体 (Fig. 8) を多くみかけた。これらは尾部の形や再生した鰭の形が一様でなく, 土地の漁師もスズキなどによって食いちぎられたのだと云っており, これが別の種類として取り扱われるようなことはなかった。

考 察

筆者は有明海において湾口部の外洋性水域から湾奥部に注ぐ河川の下流の淡水域までの広い水域でエツ類の分布を調査し, その分布水域の出来るだけ広い範囲で, また各種の漁法でとれたものよりエツ成魚を採集し, その魚体調査を行ったが, その結果からみると, 採集したエツは1種類であったと考えられる。このエツは吉田による朝鮮半島産エツ類の研究結果との比較によると, マエツとチョウセンエツとの中間形と考えられるが, 両種との比較を行うために測定した4形質のうち, 臀鰭条数と稜鱗数はマエツとチョウセンエツとの差が小さく, 有明海産エツの値が両方に重複しているために, 有明海産エツを上記形質の測定によって朝鮮半島産エツ類と比較する場合, 取り扱う標本が少なければ, 個々の標本は個体によってマエツかチョウセンエツのいずれにも当てはまることが考えられる。また, 有明海産エツは4形質のうち, 脊椎骨数と縦列鱗数はチョウセンエツに近く, 臀鰭条数はマエツに近いために, いずれの形質を重視して同定するかによってもどちらの種類にも同定される可能性がある。最も重要な形質と考えられる脊椎骨数についても, チョウセンエ

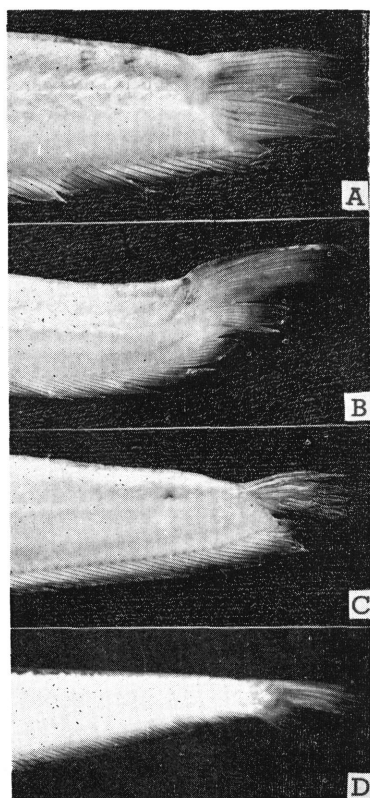


Fig. 8 Regeneration of the tail.
A~C : Regenerated tail
D : Normal

ツの値と大きく重複し、マエツとは全く重複してなく、有明海産エツを群として比較した場合にはマエツとの明りょうな差異が認められるが、しかしながら、チョウセンエツの値とも全く一致しているのではなく、その値はマエツの方へかなり大きくずれているために両種の中間の値を示す個体の中にはチョウセンエツよりはむしろマエツに近い値を示すものもあり、したがって、脊椎骨数による場合でも個体によってどちらの種類にも同定される可能性がある。

これまでの有明海におけるエツ類の棲息に関する報告は先に述べたとおりであるが、これらには採集場所、測定個体数についての説明はほとんどなく、同定した理由も不充分なものが多い。吉田もその報告の中で、従来のエツ類の記載では臀鰭条数のみを重視しすぎていることを指摘している。これらのことがらより、有明海にはエツ類は1種類しか棲息しておらず、これは中国大陸産のマエツ *C. mystus* とチョウセンエツ *C. ectenes* の中間型であるが、これまでの有明海産エツ類に関する報告では、調査個体数が少なかったために、または種の同定に用いた形質がかたよっていたために、個々の標本はマエツかチョウセンエツのいずれかとして査定され、結果的には有明海に2種類のエツが棲息していることになった可能性が強い。有明海産エツの成魚の大きさは最大は体長400mm近くとなり300mmを越す個体が多い(矢部によれば、これはチョウセンエツの大きさに該当する)が、これらの大型個体と同時に200mm前後の小型の個体も漁獲される。しかし、それらの形態には種類の違いによると思われる差異は認められず、その大きさの相違は年令によるものと考えられる。エツ漁業者からの聞き取りによっても種類の異なる2群がいるという確信のもてるような話は聞かなかった。吉田の報告によれば、マエツとチョウセンエツの2種類のエツが朝鮮半島と我国の有明海を含めた日本近海に分布しており、有明海からチョウセンエツの稚仔魚を採集したとしているが、この報告には有明海にはチョウセンエツ1種のみが棲息しているのか、それともほかにマエツもすんでいるのかについては述べられていない。

先に述べたとおり、我国近海にエツ類が分布しているという最初の報告は Siebold が長崎で得た標本によって Temminck と Schlegel が1846年(弘化3年)に *C. nasus* を記載したものであるが、これは1926年に Jordan と Seale によって中国大陸産の *C. mystus* の異名同種であるとされた。*C. nasus* の採集地である長崎は日本の最も西端に位置し、エツ類が主に分布している大陸に比較的近い距離にあるが、長崎に面した外海は対馬暖流の影響の強い外洋性海域である。一方、有明海内の1小湾である諫早湾も長崎に近い距離(約25km)にあり、この湾にも有明海産エツが分布している。長崎が面している外海の海洋条件および魚類相より考えて、Siebold の標本がこの外海域で漁獲されたとは考えられず、また、このような古い時代に大陸沿岸の漁獲物が長崎で水揚げされ、しかも、これが長崎で採集されたものと記録されたとも考えられない。むしろ、比較的近距离にある有明海のどこかで漁獲され、長崎まで運ばれたものが上記の標本になったという可能性の方が強い。オランダの Leiden の博物館に保存されている Siebold の魚類標本について再査した Boeseman¹⁸⁾ の報告により *C. nasus* 2個体についての測定結果を筆者の有明海産標本および吉田の朝鮮半島産のエツ類と比較してみると、*C. nasus* の臀鰭条数は85~88で *C. mystus* および有明海産エツの値の範囲内にあり、*C. ectenes* には該当しない。稜鱗数は46で朝鮮半島産2種類の中間の値であり、有明海産エツの平均値に当る。縦列鱗数は

標本がいたんているためか、測定値は明確でなく、その数は65以下とされている。この数は *C. mystus* のそれに当り、*C. ectenes* および有明海産エツとは違っている。しかし、Fauna Japonica の図版によって数えてみると、*C. nasus* の縦列鱗数は78であり、この数はむしろ *C. ectenes* と有明海産エツの値に当たり、*C. mystus* の値とは大きな開きがある。しかし、種類の決定に最も重要な形質である脊椎骨数については *C. nasus* の測定が行われていない。以上のことから総合すると、Siebold の *C. nasus* は有明海産エツによって記載されたものであるという可能性が強いと考えられるが、この推定が正しいとすれば、これまでに述べてきた有明海産エツと朝鮮半島産エツとの比較結果からみて、*C. nasus* は *C. mystus* と *C. ectenes* との中間形で、とちらかといえはむしろ *C. ectenes* に近い形態を持ったものであり、したがって、この場合には *C. nasus* を *C. mystus* の異名同種としたのは不当と考えられるが、上記の研究結果から *C. nasus* を復活し、筆者が採集した有明海産のエツをたたちに *C. nasus* とすることについては、なお模式標本と比較検討その他の慎重な取り扱いが必要である。

要 約

有明海にはこれまでに、2種類のエツ属の魚、マエツ *C. mystus* とチョウセンエツ *C. ectenes* が棲息していることが報告されている。1961年より1965年の間に有明海奥部とそこに注いでいる最大の川である筑後川の下流において、167個体のエツ属魚類の標本を集め、吉田が朝鮮半島産の2種類のエノ、マエツとチョウセンエツの同定に用いた4つの形質、臀鰭条数、縦列鱗数、稜鱗数と脊椎骨数について測定を行い、吉田による朝鮮半島産の2種類のエツの研究結果との比較を行った。これによれば、有明海には1種類のみエツ属の魚が分布して、これは朝鮮半島産のマエツとチョウセンエツとの中間の形態を持っており、とちらかといえはむしろチョウセンエツに近いと考えられる。1846年に Siebold が長崎で採集し、Temminck と Schlegel が記載した *C. nasus* は、後に Jordan と Seale によって *C. mystus* の異名同種とされたか、日本近海のエツ類の分布より考えて、*C. nasus* は有明海産エツであったという可能性が強い。

有明海産エツの分布域は有明海の奥部とそこに注いでいる河川の下流に限られており、5～8月の産卵期には河川の下流に溯上して産卵を行い、冬期は湾奥部の沖合部分で越冬する。有明海におけるエツの漁獲は主に産卵期に湾奥部の河口附近と筑後川下流において刺網類によって行われる。

文 献

- 1) JORDAN, D. S. and SEALE, A. : *Proc. U. S. Nat., Mus.*, **29**, 1433, 517~518, (1905)
- 2) —————and————— : *Bull. Mus. Comp. Zool.*, **67**, 359~362, (1926)
- 3) FOWLER, H. W. : *U. S. Nat. Mus. Bull.*, **100**, 712~723, (1941)
- 4) 王以康：魚類分類学, 88~89, (1958)
- 5) TEMMINCK, C. J. and SCHLEGEL, H. : *Fauna Japonica, Pisces*, 243~244, Pl. 109, (1846)
- 6) 田中茂穂：東大, 理, 紀要, **4** (3), 1, 9, (1931)
- 7) JORDAN, D. S. and HUBBS C. L. : *Mem. Car. Mus.*, **10**, 122, (1925)
- 8) 池田兵司：博物雑, **35**, 60, 108~109, (1937)
- 9) 内田恵太郎・塚原博：日本地理学会報, **16~19**, 292~302, (1955)
- 10) 吉田裕：動雑, **47**, 566, 784~789, (1935)
- 11) 田中茂穂：動雑, **45**, 531, 38~40, (1933)
- 12) 福岡県水試：有明海干潟利用研究報告, (1929)
- 13) 水産庁有明海漁業調整事務局：有明海水産要報1・2, (1959)
- 14) 矢部博：植物・動物・**9**(下)21~23, (1941)
- 15) JONES, S. and MENON, P. M. G. : *Jour. zool. Soc. India*, **14** (1) 17~36, (1952)
- 16) JORDAN, D. S. and STARK, E. C. : *pro. U. S. Nat. Mus.*, **31**, 1493, 516, (1906)
- 17) TCHANG, T. L. : *Bull. Fan Mem. Inst. Biol., Zool. Ser.* **8**, 323~327, (1938)
- 18) BOESEMAN, M : *Zoologische Mededeelingen*, **28**, 1~242, (1947)